

八戸出身の元外交官 長谷川さん



古里の子どもたちに「世界に関心を持って」と呼び掛ける長谷川晋さん＝東京都内

「広い世界に関心を」

欧州や中東などの計7カ国で外交官を務めた八戸市出身者がいる。今年4月に外務省を退職した長谷川晋さん(62)＝東京都在住＝だ。隣り合うテロの危険や未曾有の自然災害にも対峙しながら、国益を懸けて外交の最前線を渡り歩いた半生。「無我夢中で一生懸命やってきた」と振り返り、次代を担う古里の子どもたちに「広い世界に関心を持ってほしい。八戸からも道は切り開ける」と期待を込める。

(藤野武)

長谷川さんは八戸高、東京大教養学部を卒業して1979年、外務省に入省。通算21年もの海外勤務では、オーストラリア・メルボルンとフランス・ストラスブールの総領事館で総領事を、イラクとチュニジアでは特命全権大使をそれぞれ歴任し、国内でも防衛庁

古里の子どもたちにエール

(当時)に向向するなどキヤリアを重ねた。

「中高生の頃は、まだ戦争関連の話題が盛んに取り上げられていた。何百万人という単位で犠牲を生む、

社会で一番大きな問題に関心があった」という。「普通のビジネスには当初から関心がなかった。何でそう思ったのか、今考えると僕

も不思議」。将来への夢を膨らませながら過ごした八戸時代を、柔らかな表情で述べ懐する。

印象に残っている出来事の一つに、在イスラエル大使館で直面したイスラエルとパレスチナとの対立激化を挙げる。赴任1年目の和平プロセスから、2年目には双方に死者が出る争いが再開した。テロの危険がある中で、情報収集活動には緊張感があった」と明かす。

在タイ大使館に公使として勤務した2004年にはスマトラ沖地震に遭遇。タイ国内で多くの死者が出た中、大使館員も1人が犠牲者となった。「厳しい経済交

渉といっても人は直接死さない。やはり人の命が関わる話は厳しい」と静かに語る。

安全保障などで課題が山積する日本外交。「欧米主導の国際社会が中国の台頭によって変わりつつある」と指摘し、「日本は日米同盟を基軸とした外交が基本だ。米国は太平洋に面する中国の問題を政治や経済、安保の面からも考えている。欧州とは関係が決して深くない中で、現実的に連携するのは米国しかない」と強調する。

今年6月に八戸学院大と同短期大学の客員教授に就いた。「高校を終わるまで(世界で活躍する郷土出身者の)情報が全くなかった。自分が八戸で過ごしていた当時、少しでも情報があれば参考になったと思う」。自身の経験を広く伝える考えだ。

◇

◇

◇

◇

◇

◇

近日中に長谷川さんの回顧録の連載をスタートします。